行き詰まった現代詩の迷宮を突き抜け新たな抒情を求めて旅立った詩人の初期詩篇を網羅した詩集です。出版社から刊行した詩集としては詩人の第1詩集にあたり、瑞々しい感性溢れる詩集です。

（誌面サンプル）

作者より

　のろのろと詩を書き継いでいるうちに、東日本大震災があり、福島の原発事故があった。そして、あともう少しという時になって、吉本隆明が死んだ。

　何故、もっと早く書けなかったのか。後悔先に立たずとはこの事だ。私の暢気さ加減はいつまで経っても治らない。

　この詩集には、ほぼ四十年という時間が流れている。振り返れば近く、前を見れば遠い。再生装置の無い記憶媒体を再生しようとする試みが、詩を書くという事だ。そのように思えてきたところで、筆を置きたい。

（『あとがき』抜粋）

街灯に照らされた常緑樹が
青い炎のように
晩秋の夜に　浮かんでいた
ぼくは買ったばかりの自転車を走らせていた
古いニューズ・リーフのひとコマのように
勤め帰りのひとびとや女学生たちが
夜を一歩一歩区切っていた
ひとの形をした影が舗道で
さみしさと同じだけ長く延びていた

遠くにゆこう
チェーンにからみついたきのうを
ヘッドランプに灯して
ひとりで走っていた
寒い秋の夜だった

（『秋の記憶』全文）

気がつくといつも
夕陽は沈んでいる
それから魚が
空を翔ぶ時刻がやってくる

ぼくらは海底の泳げない魚
この海の深さはどうだ
溺れることさえできそうにない
言葉はみんな気泡になる
泡の形と大きさとによって意味が測られる
潮の流れは気まぐれだ
未来は密封して
時間の錨をつける必要がある
（中略）
ぼくらはエラのない魚
この海の塩辛さはどうだ

海が地球の涙でもあるまいに
翼のある魚は
抒情の空を飛行する
意味の倒立するあたり
抒情の尽きるあたり
ぼくらは魚類図鑑を突き抜け
進化の約束事を無視し
新しい銀色の鱗を輝かせる

（『魚が空を翔ぶ時刻』抜粋）

雲が空を走ることを知らなかった
そんなにもはやく雲は窓を
通りすぎて
いった
夕陽が
朝日よりも
美しいことも知らなかった
あらゆる色をつれて夕陽は沈んだ
路地裏では忘れっぽい祖父が必ず
道端のこわれかけた籐椅子
に腰かけて
いる
家の
六畳間には
足踏式ミシンが置いてある
日暮れには腱鞘炎の娘が帰ってくる
朝みた夢を縫い合わせたくて孫も
食卓に顔をだす
ジィジィのくれたクレヨン・セットに
夕陽の色ははいっていたかい

（『夕陽の挿話』全文）

電気冷蔵庫は朝の祭壇
地平線が冷凍室で眠っている
NHKの『明るい農村』をみながら
氷をかじると
潮の味がした
と
地平線から水が溢れだし
3DKは海になった

冷凍したはずの神話が解凍し
引用符で飾られた履歴を喋りはじめる
ぼくが聞きたいのは
太陽と
風と
水と
樹木
からなる　ちいさな国の来歴

いつから
ヒトは水に溺れるようになったのか
進化の水路を5億年遡れば
誇り高い銀鱗を身に纏い
オルドビス紀の海洋を遊泳する
ぼくらの祖先に遇える

祭壇に水を供えるのは
すぐれた遊泳者として
オウム貝たちと交信した頃を
魂が憶えているから？

体をやや傾けて
ぼくは3DKの海を渡った
扉の外は硝煙たちこめる荒野
体の中心あたりで太古の海が拡がる

（『朝は海』全文）